

# 我が国の農産物需給の実態

チッソ旭肥料株式会社 技術部

顧問 安 田 環

## はじめに

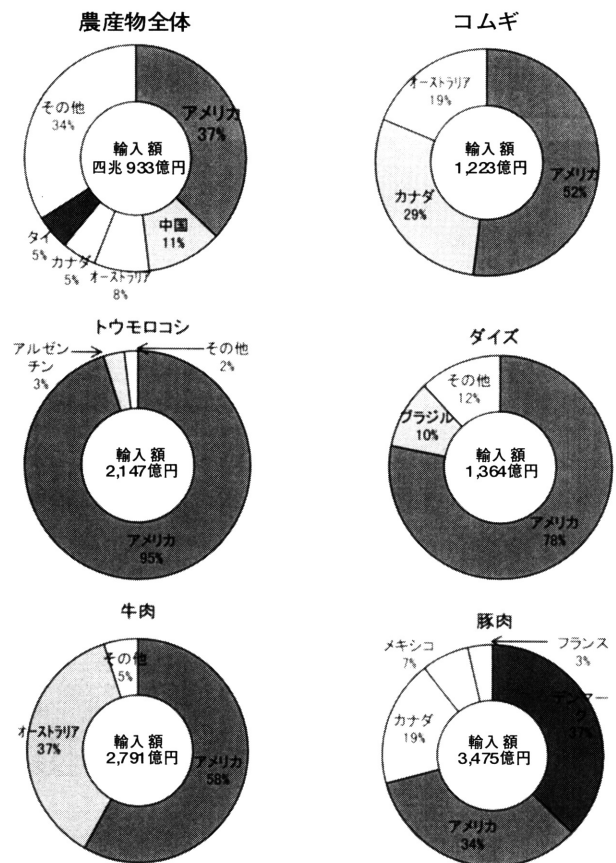
我が国の食料自給率はカロリーベースで40%を割り、穀物ベースでは26%にまで低下している。この基礎であり、かつて聖域でもあったコメですらWTO協定のミニマム・アクセスとして65万トン(2000年)の輸入を余儀なくされている。一方、飼料や油料農産物の輸入量はおよそ3200万tに達している。農水省は2010年の食料自給率目標を現在より5%上げて45%に設定した。しかし、耕地面積の減少、単収の頭打ち、転作作物の作付け面積の微増、加えて食べ残し等のロスによってその実現はかなり厳しいように思われる。コメは1970年前後には330万haに作付けされ、1300万t~1400万tの収穫があり、1人当り年間100kg以上を消費していた。その後ジャンクフードと外食産業の進出でコメ離れが進み現在は年間1人当り供給量で65kg、消費量で60kgまで低下している。そして、裕福になるにつれ食物連鎖の階段を上るようになり、肉や油の消費が増えている。その結果、脂肪の摂り過ぎ等による栄養摂取のアンバランスが生じ、肥満による健康障害も起きている。一方において、インド亜大陸とサヘル以南のアフリカでは依然として人口は増え続け、半数の人が飢餓に苦しんでいるという。貧困と配分が大きな問題となっている。

## 1. 主用農産物の需給

主用農産物の国内生産量と輸入の実態を表1及び図1に示した。

コメの生産量は生産調整による減反により9百万tから1千万tであるが、ミニマムアクセスとして65万tが輸入されている。輸入先国別では50%がアメリカ、19%がタイ、15%がオーストラリア等となっている。現状からすれば、食用とし

図1. 主用農産物輸入の金額と国別シェア



ておよそ820万t、その他加工用と種子用を加えても900万tあれば十分と思われる。適正備蓄水準を150万t±50万tとしているが、この量は恒常的な量であるので、900万t以上穫れると余剰米がでるということになる。ただし、自給率を上げるには1

表1. 穀類の需給状況

年	コメ		コムギ		トウモロコシ		ダイズ	
	生産	輸入	生産	輸入	生産	輸入	生産	輸入
1996	10344	445	478	5928	—	16003	148	4870
1998	8960	499	570	5758	—	16049	158	4751
2000	9490	656	688	5854	—	16112	235	4829

人当たり年間80kg程度の消費は必要で、それはまた栄養バランスの適正化になり、生産調整問題の解決にもつながる。

コムギの国内生産量は転作奨励によって増加の傾向にはあるが、輸入量は一向に減っていない。パン用に硬質コムギが好まれ、国産の軟質コムギが敬遠されていることも一因と思われる。一層のコムギ振興策を講じ、輸入量の削減を行うことが必要である。輸入先国別シェアはアメリカが52%、カナダが29%、オーストラリアが19%となっている。

トウモロコシは国内産はほとんどゼロに等しく、毎年1千600万tが輸入されている。そのうち1千150万tは飼料用に仕向けられている。輸入量の大部分はアメリカからである。したがって、日本の畜産は全てアメリカに依存しているといつてよい。この大量の飼料輸入は畜産排泄物問題とし

1位はデンマークでシェアは32%、次いでアメリカの28%、カナダの17%、メキシコの6%となっている。これも飼料に換算すると、455万tに相当する。

以上見てきたように、コメ以外はほとんど輸入に頼っており、それも特定国のシェアがきわめて大きいことは、食飼料の国際需給の変動や輸出国の政策如何が大きな影響を及ぼすもので、きわめて不安定な状況にあるといつてよい。

以上の輸入農産物をNに換算すると、玄穀で62万t、肉類で18万t、計80万tとなり、この他グリーンソルガムや魚介類等を計算すると、総計95万tにのぼる。

1960年から最近までの輸入農産物の上位10品目を見ると(表2)、かつては穀類がトップを占めていたが、最近は豚肉や牛肉などの輸入が上位を占めている。また、近年ではアルコール飲料や生

表2. 輸入農産物の上位10品目の推移(金額ベース)

	1960	1970	1980	1990	1995	1999
1位	コムギ	トウモロコシ	トウモロコシ	トウモロコシ	豚肉	豚肉
2位	ダイズ	ダイズ	ダイズ	牛肉	牛肉	タバコ
3位	粗糖	コムギ	コムギ	アルコール飲料	タバコ	牛肉
4位	トウモロコシ	粗糖	粗糖	豚肉	トウモロコシ	トウモロコシ
5位	牛脂	グリーンソルガム	コーヒーマメ	タバコ	アルコール飲料	アルコール飲料
6位	コメ	バナナ	グリーンソルガム	ダイズ	ダイズ	ダイズ
7位	コブラ	タバコ	牛肉	コムギ	コムギ	コムギ
8位	脱脂ミルク	コーヒーマメ	豚肉	ナタネ	鶏肉	鶏肉
9位	タバコ	牛脂	タバコ	鶏肉	コーヒーマメ	生鮮野菜
10位	フスマ	羊肉	アルコール飲料	コーヒーマメ	生鮮野菜	コーヒーマメ

て環境保全上大きな問題となっている。

ダイズは国内生産量が3%程度であったが、近年ようやく上向き傾向にある。しかし、それは微々たるもので、480万t以上が毎年輸入されている。輸入先国別シェアはアメリカが78%、ブラジルが10%等となっている。

牛肉は72万tが輸入され、そのうちアメリカが48%、オーストラリアが46%を占める。これを飼料に換算すると792万tに相当する。

豚肉の輸入は金額的には牛肉を上回るが、量的には65万tである。輸入先国の

表3. 野菜輸入の年次変化(千t)

野菜種	1990	1992	1994	1996	1998	1999
生鮮野菜	258	286	652	630	740	923
冷凍野菜	214	262	354	405	466	483
塩蔵野菜	197	223	220	263	238	239
トマト加工品	108	113	135	160	170	188
その他調製品	169	237	301	346	343	393
合 計	946	1,121	1,662	1,804	1,957	2,226

生鮮野菜；タマネギ、カボチャ、キャベツ等、アスパラガス、ニンニク  
その他調整品；乾燥野菜、酢調整野菜、その他  
林産物(シイタケ、マツタケ)、イモ類は含まない

鮮野菜の輸入が増えていることが特徴である。

## 2. 野菜類の需給

野菜の全体の輸入状況を年次別に見ると(表3)、生鮮野菜を中心にこの10年間で倍増し、さらに年々増加の傾向にある。

それらの内訳と国内生産量との対比を表4に示した。量的に多いのは、タマネギ、カボチャで、セーフガードで問題となっているネギはこの2～3年で急増し、4万tを超えるまでに増えている。輸入先国を見ると、カボチャはニュージーランド、タマネギはアメリカが主体で、ネギとシイタケ(林産物)は中国となっている。アスパラガスはオーストラリア、アメリカ、メキシコ、フィリピン等で、国産量に匹敵する量が輸入されている。

ネギ同様問題となっているシイタケも国産量の56%を占めるまでに増大しており、もし消費量が一定とするならば、生産者にとって一大脅威といえよう。これまで、輸入量が一定を保っているような野菜、例えばカボチャやアスパラガスなどはそう問題にはならないように思われる。タマネギは20万t以上が輸入されており、端境期の夏場に出荷できるような国内生産体制を確立することが、輸入抑制につながるものと期待される。

その他の野菜については表5に示したように、どの野菜も増加傾向にある。

### おわりに

以上我が国における食飼料の生産と輸入の実態につき記載した。これらに関し、食料自給率向上の観点から、セーフガードの是非の観点から等いろいろ論議のあると思われるが、それは読者自身

表4. 生鮮野菜の輸入(千t)

年	シイタケ		カボチャ		タマネギ		アスパラガス		ネギ類	
	輸入	国産	輸入	国産	輸入	国産	輸入	国産	輸入	国産
1990	—	—	99.2	286.4	86.0	1,317.0	11.6	—	—	557.7
1992	—	76.8	122.2	277.9	35.1	1,397.0	15.0	—	—	564.9
1994	24.3	74.3	156.8	264.9	206.9	1,109.0	21.3	23.5	8.3	524.6
1996	24.4	75.2	143.8	234.4	184.5	1,262.0	22.2	23.2	9.4	546.8
1998	31.4	74.2	128.9	257.8	204.9	1,355.0	19.9	24.4	17.4	508.5
1999	42.1	—	133.2	253.6*	262.2	1,205.0	24.8	—	42.4	532.4
輸入先国とシェア(%)	中国(100)		ニュージーランド(69) メキシコ(15) トンガ(11) アメリカ(2)		アメリカ(66) 中国(16) ニュージーランド(13)		オーストラリア(25) アメリカ(22) メキシコ(20) フィリピン(17)		中国(100)?	

\* 2000年概数

表5. その他野菜の輸入(千t)

年	ニンニク		ブロッコリー		キャベツ		ニンジン		エンドウ		ピーマン	
	輸入	国産	輸入	国産	輸入	国産	輸入	国産	輸入	国産	輸入	国産
1992	—	—	—	—	—	1,614.0	—	690.3	—	52.1	—	166.5
1994	—	31.2	—	—	—	1,510.0	—	657.7	—	46.9	—	164.7
1996	23.6	18.2	73.8	85.1	2.7	1,539.0	30.2	736.2	14.0	42.2	4.0	166.3
1998	26.7	20.6	75.1	73.5	43.1	1,407.0	34.0	648.1	14.5	36.2	8.8	160.0
1999	—	29.2	79.2	83.6	21.4	1,476.0	43.6	676.7	20.9	37.3*	16.2	170.9*

\* 2000年概数

の判断にゆだねることとする。ただ、途上国からの輸入野菜は外貨かせぎのため、輸入国の規格品のみを輸出し、はねものを自国消費といった現実のあることを付け加えておきたい。

なお、これに関する参考資料のいくつかを下記に示す。

農林統計協会：食料・農業・農村白書，

同附属統計表

農林水産省統計情報部：作物統計，

ポケット農林水産統計

農林水産省：農林水産物貿易レポート

真崎正二郎：日本の輸入食品，幸書房(1999)

安田 環：食料自給率70%を目指せ，

季刊雑誌「肥料」84、85、86、87  
(1999～2000)